

与えられた、いのちのち

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

与えられた、いのちのち

創世記二・四後半―九、一五―二五

沖村裕史

み言葉はまず、神が陶器師が土から器を造るようにして、人を造られたと語りまします。漸く出来上がった土の人形に、塵あぐたのごときその土くれに、いのちの息を吹き込むことによって、神は、人を造り、人へのいのちを与えられ、人は生きる者となった、と伝えていきます。

これは、私たち人間は、神のごとく何でもできる絶対的な存在ではなく、土くれではないということ、この地上にあるすべてのものと何一つ変わらない、相対的な存在であるということです。そんな私たちが生きるいのちは、ただ神のみ心によって与えられたもので、神なくしては生きることのできない存在であるということ。人はすべて神によって「生かされて生きる者」であるということです。

このことは、自分の「誕生」のときのことかと思いを致せば、容易にうなづけることです。誰も自分が生まれた時のことを覚えていない人はいません。つまり私たちの誰一人、自分の意志によって生まれて来たものはいないということです。親もこんな姿形に私たちを産もうと考えて産んだわけではありませぬし、そんなことができるはずもありません。自身にとつても親にとつても、私たちがいのちは、ただ与えられたという他ならないのです。

そのようにして「生まれた」、いのちを与えられたということは、実に、ただ「望まれた」ということです。それも、単に親の望みというのではなく、この世界の根源にある望みです。それだけが、私たちの存在の意味であり、根拠です。人が一人生まれるためには、父と母が生まれ、出会い、しかも愛を育むという、そのために必要なあらゆる要素が寄せ集まり、考えられないほどの偶然が組み合わされていかなければなりません。その考えられないほどの偶然を、私たちは普段「奇跡」と呼び、聖書は、それを神のみ業、神のみ心である、と教えるのです。

これを「人間は奇跡」と表現した人がいます。井上ひさしという作家です。ユニークな作品を数多く残した人ですが、子どもから大人まで様々な世代を魅了したのは、やはり「ひよっこりひよつたん島」です。そこには完璧な登場人物「スーパーマン」やヒーローは登場しません。個性的で欠点だらけで、それでいてすぐ身近にいるような親しみやすい登場人物たちが織りなすドラマは、ときにワクワクドキドキ、ときに滑稽で笑いを誘うその中に、人としての悲しみと苦しみ、そのかけがえのなきが心に沁みるペーソスとユーモアにあふれています。そんな井上ひさしが亡くなった直後、一人の文学者が、井上文学のポイントは「人間は奇跡である」という彼のことはある、と語っています。その「人間は奇跡」について、井上がこう記しています。

人間が生まれてくるのは精子と卵子の結合による。ところで、その合体のときにある卵子はたった一つ。しかし精子は少なく

とも一千億あると言う。そして、そのうちの一つだけが卵子と結合するのだから、精子の生き延びる確率は実に一千億分の一。あとの999億9999万9999個の精子は、すべて死んでしまう。私たちの存在はそれほどの犠牲の上に成り立っており、一千億倍の競争に打ち勝った精子によって、私たちは今、この世に生を享けているのである。だから、ここにいのちがあること、生きていくことだけで奇跡なのである、と。

壮大な宇宙の中に浮かぶ小さな星、地球。その上で、いのちを生きたる奇跡的な存在としての人間なのです。

ところが、イスラム国に行こうとした青年について、街角の若者たちは、自分で決めたことだからいいではないか、と答えました。わが子を虐待していても、他人の家庭に口出すなど、わが子のいのちを自分の所有物のように考える親がいます。経済優先で、人間の造り出した安全神話に寄りかかって原子力政策を進める政治家たちがいます。自分のいのちが、人のいのちが、神に与えられた、かけがえのないもの、尊厳あるものであるということに、多くの人が思い至りません。自分のいのちも自分の人生も、自分のもので、自分の自由にしてよいものと考えます。ときには、誰の世話にもならない、自立して生きなければならぬ、何か自分一人で生きていくような気持ちになることがあります。その癖、そんなときに決まって、深い孤独と重い不安に襲われます。人は孤独と不安に苛まれることなしに生きることなどできはしないのだと、一人勝手に殻に閉じ籠もり、出口のない、孤独と絶望の迷路に迷い込みます。しかし

真実は、私たちの誰も一人で生きてなどいません。一人で生きていけないだけでなく、一人で生きていくことなどできない私たちがです。

神は、そんな私たちがよりよく生きるために、二八節「人が独りであるのは良くない。

彼に合う助ける者を造ろう」と言われたとあります。このみ言葉が、神によっていのちを与えられた私たちが、このいのちをどのように生きるのか、ということをお教えてくれています。

私たち人間に、自分の助け手を造ることなどできません。アダムも、自分では、自分に合う助け手を見いだすことさえできませんでした。しかし、彼が深い眠りについている間、つまり彼が何もしないうちに、神が助け手をご用意くださいました。

私たちが、本来自分は半人前なんだ、否、半人前でなければいけないんだ、と考えることができたなら、人生はどれほど楽に、また豊かなものになるのでしょうか。一人で一人前にしなければと思うから、無理をして、ストレスをためて、頑なにになり、自己防衛的になってしまします。労働も、貯金も、食糧も、成績も、出世も、みんな今の半分で十分だと気がついたら、どんなに人生が、平安と恵みに満ちたものとなるでしょう。まだ足りないと思つてるところに、神も、イエスさまのことも、隣人のことも、飢えている人のことも考える余地のない生活が生まれてくるのです。

すべては神のみ手のうちです。ゆりかごから、最後に賛歌を歌って天に召されていく時まで、神が人と人々を出会わせて結んでくださっているのです。

皆さまにとつて、神が結んだ隣人とは誰でしょうか。決して分けることができない、神が結び合わせてくれた人は誰でしょうか。どうか、その人々との関係がたとえどれほど困難なものであろうとも、共に、半人前の存在としてわかちあひ、その半人前の私たちが神がお世話してくださっていることを堅く信じ、今日からの新しい週も、神に賛美と祈りを捧げる日々を過ごして参りたいと願う次第です。

(二〇一四年一〇月二六日、三位一体後第一九主日・秋の伝道礼拝二)